

第5期富谷塾 開塾式



第5期富谷塾の開塾式（第一回定例富谷塾）が5月15日に富谷市役所で開催されました。

今回は「令和の自己紹介」と題して、これからの時代に必要な自己紹介のポイントを紹介し、一人ずつ自己紹介をしていただきました。やりたいことや実現させたい世界観など熱い思いが語られ、目標に向けての意気込みを感じました。1分間という限られた時間内での自己紹介では伝えきれないことも多かったようで、交流タイムでは積極的に話しかけている塾生の姿が見られました。

出席者の約3分の1が新規入塾者だったこともあり、緊張感のある雰囲気の中で始まった開塾式でしたが、会が終わる頃には打ち解けて和やかな雰囲気でした。

今期は5月31日現在108名の方が入塾されています。5月末には「スタートアップ創出プログラム」の申込が締め切られ、今年度の富谷塾が本格的にスタートです。



気軽に立ち寄れる場所を目指して



TOMI+1階チャレンジスペースの様態替えをしました。ここは誰でも自由にお使いいただけるスペースです。初めて来た方でも入りやすい空間を目指しています。

先日入塾した方からこんな話を聞きました。その方は仕事など、作業をするためにチャレンジスペースをたびたび利用していたのですが、偶然居合わせた（おそらく）塾生に声をかけられ富谷塾のことを知り入塾に至ったそうです。これからもそんな出会いの場になってくれたら嬉しいです。

歴史と市民の接点を作る ことが自分の役割



富谷市民俗ギャラリー
学芸員 清水勇希さん

TOMI+3階にある富谷市民俗ギャラリーにいる学芸員の清水勇希さん。話しかけると気さくに何でも答えてくれる清水さんは、普段から質問されている姿がよく見られます。今回はそんな清水さんのプライベートにも少し踏み込んでお話を聞かせていただきました。

一清水さんが歴史に興味を持ったきっかけは？

小学校3年生のときに総合の時間で「地元を調べよう」という授業があったんです。地元が山梨なので武田信玄が行った治水工事（信玄堤）について調べました。歴史に興味を持ったのはそれがきっかけですね。信玄堤は今も一部機能しているんですが、現場を実際に見たときに、1500年代のものが今も役に立っているんだと驚きました。そのとき歴史のすごさや面白さを感じて、そこから歴史にのめり込んでいきました。

一その後の子ども時代は？

コンビニで歴史のうんちく本をねだるような小学生でしたね。テレビ番組は歴史と聞けば何でも見ていました。小学校高学年の頃には、今読んでいるものと変わらないような本を読んでいて、中学生の頃には歴史に関する知識は一通りあったと思います。

一実は法学部出身とのことですが

歴史的な知見を得るだけなら大学の文学部歴史学科に進む道もありましたが、そのときの関心事は、なぜ歴史を残し継承していく必要があるのかでした。

歴史は文化財保護法という法律で守られているわけですが、その法律がどういうロジックで歴史を保護しているのか、行政の制度としてどうやって歴史を守って継承していくべきなのかということに興味を持ち始めました。視点が変わっていったんです。それで法学部で行政学を学ぶことにしました。山梨学院大学に文化財保存の第一人者の先生がいたので、入学したその日に弟子入りしました。



一歴史を保護する意義って何でしょうか

意外かもしれませんが、それに関してはいまだに答えがありません。グローバルで見たときに、日本は制度がまだ確立されていなくて曖昧な部分が多いんです。その答えを探し続けて、法的にも行政学的にも、どういう根拠を持って歴史に接していくかが自分の生涯の課題だと思っています。

一富谷の歴史を保存していくことについて

法律や条例で守っていくことも大切ですが、その前に市民に歴史を知ってもらうことがスタートだと思っています。そしてわかりやすく伝えていくことが自分の使命なんだろうなと。知ってもらった上で次のフェーズに移っていくと思っています。

一富谷の歴史でぜひ知ってもらいたいことは？

しんまちの宿場町としての400年の歴史が注目されがちですが、富谷にはもっと深い歴史があることも知ってもらいたいですね。志戸田にある行神社や大亀にある神社は平安時代の文書に登場しているんです。その頃から富谷に人が住んでいて、今あるような場所が平安時代の文書に出てきているんだということをぜひ知ってもらいたいです。

また民俗ギャラリーにあるイノシシ形土製品は2千年ぐらい前のもので、富谷市内で出土されました。大昔の富谷を物語っているのでぜひ見てもらいたいです。

コロナ禍になる前は年間100館もの博物館に行っていたという清水さん。その知識欲は止まるところを知りません。専門を持ちつつ、幅広く引き出しを持つことが信念だそうです。趣味も多岐にわたり話題豊富なので、見かけた際にはぜひ話しかけてみてはいかがでしょうか。